

私のあしながおじさんは
嫉妬の鬼でした

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

ライトが熱い。ヘアスプレーの微粒子が光を弾いた。仕上げの指先を離した瞬間、モデルの前髪がふわりと浮き、観客席から小さなざわめきが始まる。

ヘアメイク技術大会、準優勝。

表彰台の端っこで拍手を受けながら森田美咲は深呼吸した。手首まで赤くなるのが自分でも分かる。足は震えていた。

控室へ向かう廊下で、黒スーツの男に呼び止められる。

「うちの社長が、君の“仕上げ”を褒めていてね。少し話せる？」

差し出された名刺には都内の大手音楽事務所のロゴ。

応接室に通されると奥のソファで片脚を組む男がこちらを見た。

無表情。名前を告げられる。「神崎健太郎」。テレビ越しに何度か見た

ことのある歌手。実物は思っていたよりも痩せていて、視線は鋭い。

「悪くない」と、最初の言葉はそれだけだった。隣の社長が笑った。

「うちの看板。現場、ひとつ入ってみる？」

専門学校を出たばかりの自分には願ってもない提案だった。

美咲は深々と頭を下げた。

「お願いします。どこでも、何でも、やらせてください」

翌週、都内のスタジオ。

黒のパンツに地味なスニーカー。動きやすさ優先、が美咲のルール。昼過ぎ、ロケ弁のフタをそつと閉じる。夜、残りを家で食べれば一食浮く。海外留学するために節約。そう思った瞬間、視界が揺れた。

寝不足と緊張と、空腹。転びかけた肘を誰かが掴む。

振り向くと神崎が立っていた。弁当のフタを無造作に開け、箸を突き立てる。

「全部食え。倒れられても困る」

彼の目に射抜かれる。強い、けれど冷たくはない。美咲は黙って一口頬張った。味がちゃんとする。そんな当たり前に、泣きそうになる。

夜。ロッカーで荷物を抱え、駅へ急ぐようにすると、名を呼ばれた。

振り返ると神崎が鍵束を回している。

「お前、どこ住んでる」

「川越です」

「遠い。しかもその体で飯、抜くんだろ。……うち来い」

「えっ」

「自宅兼スタジオ。人の出入りは多い。心配するな。お前なんか相手にせんから、安心して住め」

拍子抜けして、思わず笑ってしまいそうになる。

「……本当に、いいんですか」

「倒れられる方が困る」

ぶっきらぼうに言い捨て、歩き出した背中は大きい。

美咲はバッグの中の弁当の重みを確かめた。

「よろしく願います、神崎さん」

その夜、電車の窓に映った自分の顔は、少し大人びて見えた。

胸下までの髪が揺れるたび、未来が触れていく気がした。

彼の音と、彼のやり方。そのどちらも、今はただ、眩しかった。

第二話

引越しは思ったよりあっけなく終わった。

神崎健太郎の家は、外観だけ見れば普通の三階建て。

けれど二階のリビングは壁一面が防音ガラス張りのスタジオで、奥に編集用のデスクや楽器が整然と並んでいる。

木目のフローリングは足音を吸い込むように静かで、どこもかしこも音を作るための空間という匂いがした。

「お前の部屋は三階。バスルームはそっち。鍵は掛けなくていい」
最後の一言で、美咲は思わず立ち止まった。

「えっ、なんで」

「ここは俺の家だ。見られて困るもの、最初から置くな」

それ以上は言わせない、というように視線を外す。

美咲は、プロの現場を間近で見られるという興奮と何か踏み込んではいけない領域に足を踏み入れたような緊張、両方を抱えていた。

同居一日目。

「起きろ。メシ」

ドアを開けると、トレーナー姿の神崎が片手にマグカップ、もう片手にパンの袋を持って立っている。寝起きの美咲を上から下まで一瞥し

「……細いな。こんなんじゃない現場で倒れる」と低く呟く。

そのまま顎に指をかけられ、喉、鎖骨の辺りまでなぞられる。

冷たい指先なのに、妙に熱が残る。

「ちゃんと食え」

短く命じられ、パンを押し付けられる。美咲は言葉を失ったまま頷くしかなかった。

午前中はレコーディング。海外のシンガーとのリモートセッションで神崎はほとんど無駄口を叩かない。相手の歌声のわずかなズレを一瞬で聴き取り、指先で鍵盤を叩きながら指示を飛ばす。楽譜をめくる音

すら、ここでは音楽の一部のように響く。

「もう一回、Aメロから」

その声は淡々としているのに、背筋を走るような鋭さがあつた。

スタッフ全員が呼吸を合わせ、数分後には別物のような完成度のトラックが生まれる。美咲はその工程を見ながら、昨日抱いた印象を確信に変えていた

—この人は間違いなく、一流だ。

昼時。三階の自室でコンビニのおにぎりを食べようとしたとき、ドアがノックもなく開いた。

神崎は、おにぎりをじっと見たかと思うと、美咲の手から取り上げて台所へ消えた。戻ってきたときには湯気の立つスープと卵焼きと焼き鮭が皿にのっている。

「現場の人間は体が資本だ。そんなもんで済ませるな」

「……ありがとうございます」

視線を合わせると、何かを探るように一瞬だけ目を細めた。

それは優しさにも見えたし、支配の予告にも見えた。

収録が終わる頃、健太郎はスタジオの片隅に美咲を呼び寄せた。

「お前、髪、下ろしてみろ」

言われるままにゴムを外すと、栗色の髪が肩から胸元へ流れ落ちる。

その毛先を、彼は手の甲でなぞった。

「……悪くない」

それは褒め言葉のはずなのに背中に微かな寒気が走る。距離が近すぎて、彼の呼吸が頬に触れた。それだけ告げて去っていく背中。

扉が閉まった後も、首筋の感覚は消えなかった。

この家には鍵がない。ドア一枚隔てた向こうに、いつでも彼の気配がある。安心感と、抗えない緊張。その両方に、美咲はもう巻き込まれ始めていた。

第三話

朝、目覚めると光よりも先に匂いが届いた。

深煎りのコーヒーと、香ばしいトーストの香り。三階から二階へ降りると、キッチンで健太郎がマグを片手に立っていた。

グレーの部屋着。髪はまだ濡れていて、首筋に水滴が落ちている。

「……ほら」

差し出されたのは卵を落としたスープ。熱い湯気が指先をくすぐる。

「今日の現場は午前からだ。食つとけ」

隣に腰を下ろされ肩が触れた。偶然ではない距離感。

スープの温度よりも、そこにいることが胸を温めていく。

スタジオに入ると、健太郎は一瞬で“現場の顔”になる。マイクを前にしたアーティストの立ち位置を数センチずらし、イヤモニの音量を調整し、たった一言でその場の空気を締める。

「もう一回。今度は、俺を見て歌え」。

相手が海外のシンガーでも変わらない。流暢な英語と、ギター一本で一気に世界を変える。スタッフの目線が集中し、美咲も思わず手を止めて見入ってしまう。やっぱり、この人は本物だ。

——けれど、その本物が、夜にはまったく別の顔を見せる。

ある夜。現場から帰ると、荷物を置く間もなく腕を引かれた。

「お前、今日の昼また弁当残しただろ」

低く押さえた声。リビングの奥に押し込まれる。

驚いて顔を上げる間もなく、健太郎の唇が強引に重なった。

湿った吐息と一緒に舌が入り込み、奥を舐められる。

「んっ……私みたいなのに手出さないって……」

健太郎は口元をぬぐって、にやっと笑った。

「……お前、マジに受け取ったの？ 男と女が同じ屋根の下にいて、やることなんかひとつしかねえだろ」

そのまま肩を掴んでベッドに押し倒す。

「や、やだ……」

「やだじゃねえ」

指先が器用にブラウスのボタンを外し、スカートのファスナーまで一気に下ろされる。あっという間に下着姿にされ、両腕で胸を隠そうとした瞬間、手首を取られて剥がされる。

「……はは、やっぱ俺の想像どおりだね。細くて白くて、折れそうなのに胸だけちゃんとデカイ。こうだと思ってた」

その言葉と目つきに、背筋がぞくりと震えた。

片手で腰を押さえられ、もう片方の指がショーツの中に滑り込む。指腹がしっとりとした秘部をなぞり、一番敏感な突起を捕らえた。